

季節の移り変わり、節目を感じとる、昔ながらの記念日。

五節句のお祝い

日本では季節の変り目の祝祭日のことを節日(せちび・せつび)といいお供え物をしたり行事をおこなって祝つてきたという歴史があります。この節日の供物「節供(せちく)」という言葉が、節日そのものを指すようになつて「節句」という言葉になつたともいわれています。現在、五節句とは次の五つです。



一月七日 人日・七草の節供

3月3日、5月5日など、同じ数字が並ぶ五節句の中の唯一の例外は、1月7日の人日(じんじつ)の節句。1月1日から行なわれる様々な新年行事がひと段落いたところ、この日は七草粥を食べる日としてよく知られています。人日とは、文字通り「人の日」の意味。中国の占いの書には正月1日に鶏、2日に狗、3日に猪、4日に羊、5日に牛、6日に馬、7日に人、8日に穀を占つてその日が晴天ならば吉、雨天ならば凶の兆しであるとされています。ですから、7日の人の日には邪氣を祓うために、七草の入った粥を食べ、一年の無事を祈つたのだともいわれています。七草粥に入れるのはいわゆる春の七草、初春の野から摘んできた野草の生命力を食して、邪氣を祓うということであります。

三月三日 上巳・桃の節供 雛祭

「上巳(じょうし)」とは、陰曆3月の最初の巳(み)日の日の事を指します。古来には川のほとりに男女が集まり、災厄を祓う「上巳の祓い」という行事がおこなわれています。この上巳の祓いが、後の代には3月3日におこなわれるようになり平安時代宮中のお人形遊びが自然に結びつき、今のひな祭りになつたといわれます。



「生食(じょうし)」とは、陰曆3月の最初の巳(み)日の日の事を指します。古来には川のほとりに男女が集まり、災厄を祓う「上巳の祓い」という行事がおこなわれています。この上巳の祓いが、後の代には3月3日におこなわれるようになり平安時代宮中のお人形遊びが自然に結びつき、今のひな祭りになつたといわれます。



●お食い初め(生後100日目または、120日目)



「生食(じょうし)」と親の願いを込めて、祝い膳を囲み、赤ちゃんに食べさせる真似をする行事です。食器は新しいものを揃えます。お食い初め式は、一般的には男の子は全部朱塗り・女の子は黒内朱塗りのものを使用します。祝い膳は汁三菜を基本に、赤飯、鯛か鯉の身の汁、尾頭付き鯛などの焼き魚、煮物、香の物などです。

誕生

●出産祝い

出産の日を入れ7日目に両家のご両親などをよんで、名前をつける命名式と御祝いの膳を開むお祝いを行います。赤ちゃんにとっては初めての慶事となる記念すべき日です。

●お七夜(出産日から7日目)

出産の日を入れ7日目に両家のご両親などをよんで、名前をつける命名式と御祝いの膳を開むお祝いを行います。赤ちゃんにとっては初めての慶事となる記念すべき日です。

●お宮参り(生後1ヶ月前後)

赤ちゃんが初めて神社にお詣りして、

神様のご加護のもと無事に誕生したこと感謝し、赤ちゃんの成長と健康を祈ります。慣習としては、赤ちゃんは母方から送られた晴れ着を着て、おばあちゃんに抱かれ両親とともに参ります。神社では参拝だけでも良いのですが、丁寧にする場合はお祓いを受けます。



お子さまの成長とお祝いごと



- 五節句のお祝い
- お子さまの成長とお祝いごと

中国では奇数は縁起のよい陽の数とされ、一番大きな陽の数である9が重なる9月9日を、「重陽(ちゆうよう)」として節句のひとつとしてきました。古来よりこの日、茱萸(しゅゆ=ぐみの実のこと)を袋に入れて丘や山に登つたり、菊の香りを移した菊酒を飲んだりして邪気を払い長命を願うという風習がありました。平安時代には「重陽の節会(せちえ)」として宮中の行事となり、江戸時代には武家の祝日に。その後、明治時代までは庶民のあいだでもさまざまな行事が行っていたといいます。旧暦の9月9日というと現在では10月にあたり、ちょうど田畠の収穫も行われる頃、農山村や庶民の間では栗の節句とも呼ばれて栗ご飯などで節句を祝つたということです。

九月九日 重陽・菊の節供



天の川をはさんできらめく牽牛星・織女星の物語。いまから2000年前にはすでに中国で成立していた伝説だといわれ機織りに励んだ天上の織女にちなんで、星に技巧の上達を祈る「乞巧奠(きこうどん)」という宮中行事が生まれ、日本へと伝わりました。こうして7月7日の行事である「七夕(たなばた)」は、日本では奈良時代に宮中の行事としてとりおこなわれるようになりました。日本の古事記に記された、天から降り立つ神のために美しい衣を織る棚機女(たなばたつめ)の伝説も中国の織女の伝説と重なるものがあったはずです。



満1歳

●満1歳の祝い「餅負い」

誕生日に、祝い餅をついて負わせる儀式です。日本人にとって神聖と考えられていました餅を使い、「力餅の祝い」「立ち餅の祝い」としてお祝いをします。

餅を飾ります。

女の子は3月3日のひな祭り(桃の節句)、男の子は5月5日の端午の節句のことをいいます。女の子はお雛様を飾りますが、雛人形はそのままを守るもので、お人形は一人飾りが原則です。雛人形はお母さんの人形を飾るのではなく、赤ちゃんには赤ちゃんの人形を眺めましょう。

男の子も同じように「人」飾りとして兜や鎧を飾ります。



●七五三 ●十三参り

男児は3歳と5歳、女児は3歳と7歳。平安時代に始まった髪置(かみおき)の儀、着袴(ちやっこ)の儀、帯解(おびとき)の儀がまとになっています。現在のように一般化したのは、明治以降のことです。昔からの風習では、数え年で祝うのがしきたりですが、現在では満年齢で祝うケースが多く、どちらでもかまいません。

「十三参り」とは13歳になった女の子が虚空蔵菩薩の御誓願にあやかるため、その御縁日に智福の授与を祈つてお参りするゆかしい行事です。

五月五日 端午・菖蒲の節供

端午(たんご)の節句は、奈良時代から続く古い行事です。端午といいのは、もとは月の端(はじめ)の午(うま)の日という意味で5月に限つたものではありませんでした。しかし、午(巳)と五(午)の音が同じなので、毎月5日を指すようになり、やがて5月5日のことになつたと伝えられます。

七月七日 七夕・星祭



初正月 (生後はじめて迎えるお正月)

初正月は文字通り、赤ちゃんが初めて迎えるお正月。赤ちゃんの邪氣を払って健やかな成長を祈ると言う願いを込め、羽子板や破魔弓を飾ります。

